三重県津市教育委員会

初期日本語教室「きずな」「移動きずな」就学前日本語教室「つむぎ」の取組

～「誰一人取り残さない」教育の実現に向けて～

1　はじめに

三重県の県庁所在地である津市では、外国につながる子供たちが市内の多くの学校で学んでおり、その教育は一部の学校の課題ではなく、市全体で取り組むべき課題となっています。

津市教育委員会では、日本語が全く分からない状態で海外から転入した子供たちを対象に安心して学校生活を始められるよう実施している初期日本語教室「きずな」、在籍校に出向いて指導を行う「移動きずな」、そして小学校入学前の幼児と保護者を対象とした就学前日本語教室「つむぎ」を柱として、「誰一人取り残さない」教育の実現をめざした取組を進めています。

Ⅰ 外国人児童生徒教育の現状

1　地域の外国人住民の状況

津市に居住する外国人住民数は、令和8年4月1日現在で11,665人です。国籍別にみると、ブラジル(2,283人)が最も多く、ベトナム(1,970人)、フィリピン(1,936人)、中国（1,317人)、インドネシア（1,067人）と続きます（図1)。近年、国籍の多様化が進んでおり、従来から多いブラジルに加え、アジア圏の住民が増加傾向にあります。

2　外国人児童生徒の状況

令和8年5月1日現在、津市で日本語指導が必要な児童生徒は、小学校36校（488人)、中学校13校（222人)、義務教育学校1校（3人）の計50校（713人）

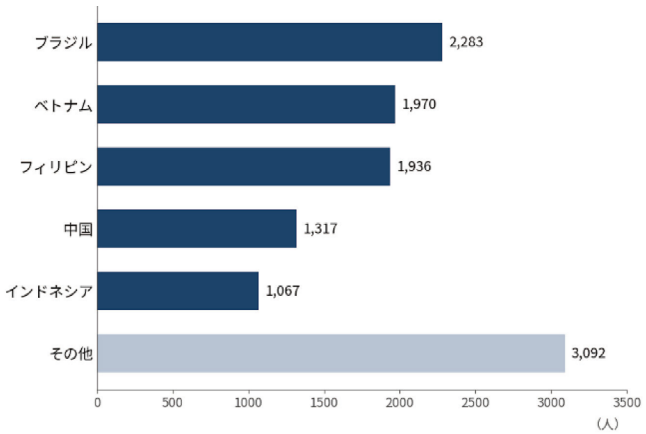


図1　国籍別外国人住民数(令和8年4月1日現在)

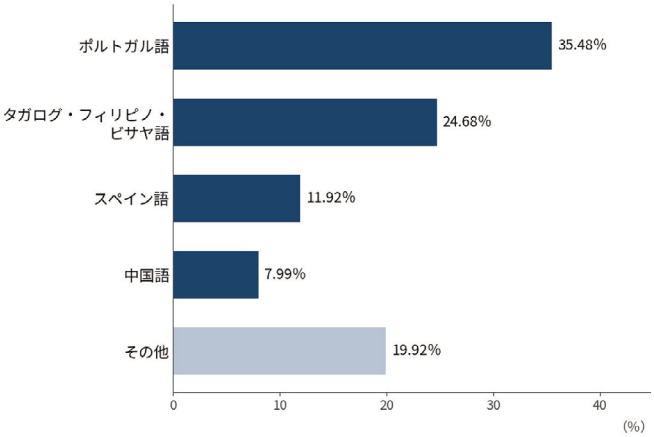


図2　日本語指導が必要な児童生徒の母語別の割合
(令和8年5月1日現在)

に在籍しています。内訳は外国籍615人、日本国籍(重国籍を含む）98人で、母語は27言語にわたります。外国につながる子供の教育は、市内のどの学校においても身近な課題となっています。

児童生徒の母語は、ポルトガル語が35.48%と最も多く、タガログ・フィリピノ・ビサヤ語が24.68%、スペイン語が11.92%、中国語が7.99%と続いています(図2)。

令和7年度に津市へ転入した外国につながる児童生徒は64人で、前年度(54人)から10人増加しました(図3)。令和4年度の83人をピークに減少傾向にありましたが、再び増加に転じています。令和7年度においては、64人の転入者のうち41人が「きずな」または「移動きずな」で学びました。

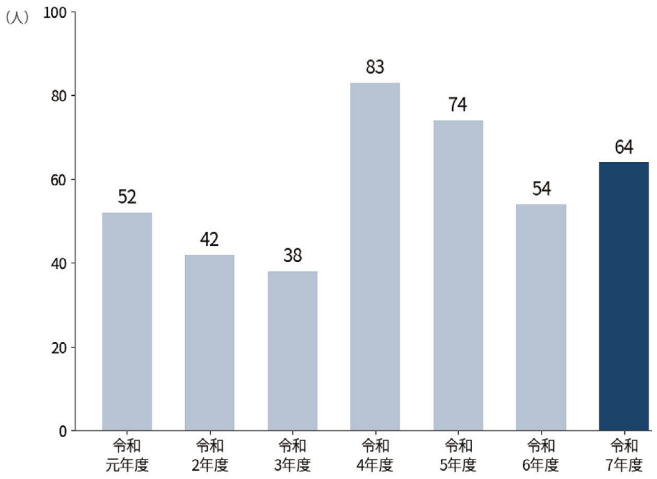


図3　年度別外国につながる児童生徒の転入者数(単位:人)

以前は特定の学校に在籍が偏る傾向がありましたが、近年は市内の様々な地域に転入があり、どの学校でも同じように日本語指導や支援を行える体制が求められています。海外から日本語が全く分からない状態で転入する子供が増えており、日本の学校に不安を抱える家庭は少なくありません。

また、日本で生まれ育ち、親子で第一言語が異なるために母語がはっきりしないケースや、社会的マイノリティであることから心理的な不安を抱えるケースもあり、日本語指導だけでなく、アイデンティティの確立に関わる取組も欠かせません。

Ⅱ 実施内容

こうした状況を踏まえ、津市では次の三つの取組を中心に、子供たちと保護者を支える体制づくりを進めています(表1)。

教　室	開　設	対象・実施場所
きずな	平成24年４月	初期日本語指導が必要な児童生徒（外国人住民が集住する幼稚園の一室に通室）
移動きずな	平成26年４月	「きずな」に通室できない児童生徒（在籍する小中学校で実施）
つむぎ	令和２年度	小学校入学前の幼児と保護者（１～３月の土曜日・全８回）

表1　三つの取組の概要

2 「きずな」「移動きずな」による初期日本語指導

(1)「きずな」という名前に込めた思い

遠い国からこの津市に来た子供たちに大切にしてほしいものは、人とのつながりです。日本の学校の友だちとのつながり、先生や周りの人とのつながり――そうしたつながりを深めていくために、この教室で日本語を覚え、人と関わることの楽しさを実感してほしいという願いを込めて、「きずな」と名づけました。

教室では在籍校の教員との連携を密にし、子供たちの様子を共有しながら、外国につながる子供たちの日本語の力を育てるとともに、安心できる居場所としての役割も担っています。



(2) 教室の概要と開設からの経緯

「きずな」は、日本語が話せない外国につながる児童生徒に対し、津市版初期日本語指導カリキュラムに

沿って、マンツーマンで動作を交えながら効率的・効果的に指導し、初期の日本語の習得、日本の学校への適応、日常生活の不安解消等を支援する教室です。日常生活で必要な日本語の力を「話す･聞く」「読む･書く」の2領域で、およそ3か月の短期間で身につけることをめざし、日本語で日本語を教える直接法で指導しています。

平成 24 年4月に津市内の小学校で開設し、平成 25 年9月に津市中央部に位置する施設へ移転して、対象を津市全域に広げました。平成 26 年4月には教室長を配置するとともに、初期日本語指導が必要な児童生徒の増加や、広域から通う経済的・時間的負担の軽減を背景に､在籍校へボランティアを派遣する「移動きずな」を本格実施しました。平成 30 年4月には副教室長を配置し、令和元年 10 月に外国人住民が集住する幼稚園の一室へ移転しています｡本年度で｢きずな｣は 15 年目、「移動きずな」は 13 年目を迎えました。

「きずな」または「移動きずな」で学習した児童生徒数は、平成 25 年度の 25 人から令和7年度には 53 人に増え、開設以来の累計は 581 人です。

「きずな」は初期日本語指導の場であると同時に、ボランティア育成の拠点でもあります。ボランティアは、教室長の指導・助言のもと、教室での実践を通して日本語で日本語を教える直接法の指導のスキルを磨き、単独で「移動きずな」の指導にあたれるようになります。令和7年度末現在、118 人の方にボランティアとして登録いただいており、原則としてマンツーマンで指導しています（写真 1)。また、副教室長を配置したことにより､教室長や副教室長が各校の「移動きずな」を巡回し、ボランティアをフォローする体制を整えています。

(3) 一日の流れ

「きずな」の一日は表2のとおりです。子供たちは午前の指導を終えると在籍校に戻り、学級の仲間と給食を食べ、昼休みを過ごし、午後の授業を受けます。

時　刻	内　容
9:00	朝の会 日直による月日・曜日・天気の確認、出席・健康観察
9:10	1時間目「話す･聞く」 絵カードや教材を使った1対1の学習
9:55	休み時間
10:00	２時間目「読む・書く」 ひらがな・カタカナ、低学年の漢字。修了前には卒室式でのスピーチの練習を行う。
10:45	きずなタイム 日本の遊びやゲーム、季節・行事や学校生活（避難訓練・遠足等）の話
11:05	帰りの会 その日学習したことの発表。その後、在籍校へ戻る。

表2　「きずな」の一日



写真1　ボランティアとの学習

また、「移動きずな」については、在籍校の時間割に合わせて「話す・聞く」「読む・書く」の2時間で学習しています。

「きずな」または「移動きずな」のどちらにおいても日本語を学ぶ時間と在籍学級で過ごす時間の両方を毎日確保しています。在籍学級においても仲間や教職員との関わりを通して、日本語を獲得し、人と人とのつながりが生まれていきます。これが、両教室に共通する特徴です。

（4）卒室式

すべてのカリキュラムを修了すると「きずな」「移動きずな」を卒室します。その子の在籍学級で行う卒室式には、在籍校の教員、日本語指導ボランティア、保護者なども参加し、学級の仲間と卒室のお祝いをします（写真 2）。卒室式の最後には、一生懸命練習した日本語で、母国のことや日本での暮らしのことなどについて、スピーチをします。その思いに応えるように、在籍学級の子供たちも卒室生に思いを返し、保護者はその様子を見て安心した表情を見せてくれます。



写真2　卒室式の様子

3 就学前日本語教室「つむぎ」の実施

「つむぎ」は、就学前の外国につながる幼児が、入学した小学校で戸惑うことなく早期に学校生活へ適応できるよう、小学校入学初期に使われる日本語や学校生活への適応指導を行い、あわせて保護者の教育相談にも応じる教室です。令和元年度にプレスクールを試行し、令和2年度に名称を「つむぎ」と決めて、集住地区の就学前の幼児を対象に実施しました。令和4年度からは市内2会場で実施し、令和5年度からは対象を津市全域の幼児に広げました。

参加者数は、令和7年度は 36 人で、現在までに 200 人近くの外国につながる幼児が参加しています。令和7年度は、令和8年度に小学校入学を予定している9言語の幼児が、1月中旬から3月初旬までの毎週土曜日に、日本語を学んだり、学校生活の体験活動を行ったりしました（写真 3）。

「つむぎ」では、ひらがなや自分の名前を読み書きする学習活動、小学校で使われる言葉を用いた創作活動、掃除や給食の配膳などの体験活動、絵本の読み聞かせなど、入学後にスムーズに小学校での活動へ参加できるよう、カリキュラムを組んでいます（写真 4）。



イメージキャラクター「つむぎん」

また、期間中には保護者向けの就学ガイダンスを実施し、就学相談にも応じています。

保護者からは、「学校生活がどのようなものか、友だちや先生とどのように関わっていくのかなど、多くの新しいことを知ることができました。子供たちがとても楽しそうに、いきいきと過ごしている様子を見ることができてうれしかったです」「はじめは、みんなの話している



写真3　「つむぎ」での学習の様子



写真4　給食の配膳体験活動

ことが分からないから学校へ行きたくないと言っていた子供が、授業に来ることを恐れなくなり、今では学校に入学することをとても楽しみにしています」といった感想をいただいています。

最終日の修了式では、恥ずかしそうに、そして、堂々と修了証書を受け取る子供の姿をうれしそうに見つめる保護者の姿があります。就学先の小学校の教職員からも、「つむぎ教室での経験がつながっています」といった声が届いています。

Ⅲ 成果と今後の課題

1　成果

(1)「きずな」「移動きずな」

入室した児童生徒について、在籍校の管理職や担当者、担任と学習状況や具体的な指導方法を共有する「きずな情報交換会」を実施しました。話し合いを重ねることで、在籍学級においても継続的・効果的な指導につなげることができました。

また、指導を支えてくださる日本語指導ボランティアからは、次のような声が寄せられています。

「きずなに参加して、ここは日本語を教える場所だけでなく、子供たちがいろんな人と関わることで自信をもって社会に出ていくための場所なんだとわかった」

「きずなで子供たちと出会って、外国や外国の人に対する見方が変わった。今まで困っていることを読み取ろうとしていなかったことに気づいた」

「きずな」は、子供たちの学びの場であると同時に、地域の大人であるボランティアが自分のことを見つめ直す場にもなっています。

(2)「つむぎ」

子供たちが小学校で行われる活動を体験することで、小学校生活への不安が軽減され、安心して学校生活を送ることにつながっています。また、未就園の子供たちにとっては、集団活動を経験することが、小学校生活への円滑な移行に向けた橋渡しとなっています。さらに、保護者に授業の参観や入学に向けたガイダンスを行うことで、入学に対する不安の軽減につなげています。

在籍している園や就学予定校とも連携し、子供たちの様子を参観していただくことで、小学校の受入れ体制づくりにも役立てられています。

2　今後の課題

転入数が再び増加し、転入先も様々な地域に広がるなかで、どの学校でも同じように日本語指導や支援を行える体制を整えることが引き続き求められます。また、海外から日本語が全く分からない状態で転入する子供や、日本の学校に不安を抱える家庭が安心して学校に通えるよう、就学前から入学後まで切れ目のない支援を進めていく必要があります。

さらに、母語や文化的背景をめぐって悩みを抱えるケースもあり、日本語指導とあわせて、アイデンティティの確立に関わる取組を充実させることも大切な課題です。

4　おわりに

今後も、「きずな」「移動きずな」及び「つむぎ」の取組を通じて、海外から転入したばかりの子供たちと保護者が安心して学校生活を始められるよう支援するとともに、子供たち一人一人のアイデンティティの確立を支える取組にも、関係各課や学校、地域の皆様と連携して取り組み、「誰一人取り残さない」教育の実現に努めてまいります。